

私の研究

私が専門的に研究しているのはアメリカの現代小説およびノンフィクション作品です。より具体的には、1970年代以降に出版された、「自然環境」と「都市環境」を描き出すことを試みている小説やネイチャーライティングを対象にして、それらの作品がいかなる環境観を提示しているのかという点について考察を行っています。これまでの研究において主なる焦点が当てられてきたのは、ピーター・マシーセン(1927-2014)、エドワード・アビー(1927-89)、ドン・デリーロ(1936-)、レスリー・マーモン・シルコー(1948-)、カレン・テイ・ヤマシタ(1951-)らの作家による作品群でした。いずれの作品においても、自然環境および都市環境が直面する危機的状況に対して作家たちが持っていた鋭敏な意識が、様々な形で表現されています。それらの意識は、非常に明白にテキストに刻み付けられていることもあれば、注意深く読まないで見逃してしまうくらいに微妙な形で、テキスト内に「隠されている」こともあります。テキストに残された上のような痕跡を辿っていくことが、私の研究が果たすべき重要な仕事であると考えています。この研究を行う上で、文学テキストが体現する環境／環境危機に対する認識が、われわれが現代の日本で暮らす上で持ちえた環境／環境危機に対する認識と、いかなるかたちで共振するのか、あるいは異なるのかという点についても考えています。

現在は、特定の時代の、特定の「環境」に暮らす人間の「生活」や「身体」の描かれ方に関心があり、2000年以降に出版された、より現在に近い作品も研究対象にしようと考えています。いろいろな現代作家の作品を読みますが、特に関心があるのはアダム・ジョンソン(1967-)とロクサーヌ・ゲイ(1974-)です。関心があったら、これらの作家の名前などを調べてみてくださいね。翻訳も出ています。

学生時代に是非読んで欲しい本

日本語で書かれた小説を、特にそこで使用されている言葉に注目をして読むと、私たちが考えるような「普通の日本語」の地平をはるかに超え出ていくかのような言葉の使用のされ方を目の当たりにすることがあります。それは私たちがいつの間にか設定した「普通の日本語」の領域の狭さを実感する経験でもあると言えます。みなさんには、読書をすることで、ぜひこの経験をしてもらいたいです。その入門として(1)町田康『くっすん大黒』(2)川上未映子『乳と卵』。そしてより難解な作品としては(3)大江健三郎『雨の木(レインツリー)を聴く女たち』をお薦めします。

ちなみに、「核」「文明」「暴力」「死」などを主題とする(3)の大江の作品においては、アメリカ文学を代表する作家ウィリアム・フォークナーによる小説が重要

な役割を果たしています。この小説を読んだことがきっかけとなり、私もフォークナー作品を手にとり、その結果、アメリカ文学全体に関心を持つに至りました。ある本によって、別の本に誘われていくというのも、読書をすることの醍醐味であると言えます。

上のような経験に加えて、もう一つ、読書を通してみなさんに持ってほしいのは、よく分からない本を読むという経験です。大学において本を読むということは、しばしば「よく分からないが、なんだかすごい」と感じる本を、粘り強く、繰り返し読み、読み解いていくという作業を意味します。この点に関連して、私の専門であるアメリカ文学から「よく分からないがすごい」現代の作品をふたつお薦めします。(4)ドン・デリーロ『ボディ・アーティスト』(5)ハリ・クンズル『民のいない神』です(これらはとても良い翻訳が出版されています)。何度読んでも、読者に「理解できた」とは感じさせない本が、私にとっての面白い作品の条件です。みなさんも、それを面白がってくれると嬉しいです。

好きな音楽

私は、ジャンルの違いにこだわることはなく、雑食的に様々な種類の曲を好んで聴きます。そして、ただ漫然と聴くのではなく、ひとつひとつの曲においてどのような楽器や音が、どのように組み合わせられているのかということを考えたり、詞の意味を深く突き詰めていったりすることで、あくまでも自分勝手な結論を出し、喜びにひたるのが趣味です。

邦楽だと、とにかく大好きなのがキリンジというバンドです。1996年から、現在にいたるまで活動を続けるこのバンドの曲を特徴づけるのは、複雑なコード進行の上で展開する繊細なメロディーと文学的な歌詞であると言えます。最も好きな曲を挙げるのは本当に難しいのですが、たとえば「段ボールの宮殿(パレス)」という曲は、「砂漠の雪なら一匙いくらで売れる? / 祈りはとにかく高くつく世の常さ / 紙切れつかんだ地団太が地下鉄(メトロ)に響く / 無節操なカモをごらん悪党ばかり」という歌詞で始まります。一つ一つの言葉がどういう意図で組み合わせられ、どういうイメージを作り上げているのかということを考えてみたくなりますよね。

洋楽だと、**One Eye Open** というバンドが、私にとっての伝説のバンドです。カリフォルニアの出身で、1996年に解散してしまったこのバンドがリリースした *Helläut* というアルバム(特に“Sweet Urchin”という曲と“Al B. Fungless”という曲)が私の大のお気に入りです。パンクとスカとファンクを折衷したかのような彼らの曲は、容易なカテゴリー化が不可能です。よく言えば前衛的、悪く言えば「メチャクチャ」な彼らの曲を聞くたびに、音楽というものの進化の方向性は予測不可能であるのだと思い知らされます。